横浜開港資料館館報　YOKOHAMA ARCHIVES OF HISTORY NEWS　第62号

開港のひろば

Number 62

編集・発行／横浜開港資料館
〒231-0021 横浜市中区日本大通3番地 電話 (045) 201-2100

発行日／平成10年10月28日(水)
印　刷／㈱エイコープリント

ピーターソン・エンジニアリング・カンパニー工場の前にならぶ労働者
1900年代　荒木セルマ氏寄贈ピーターソン氏個人アルバムより

工業都市への鳴動
—ビールから自動車まで—

山手46番ジャパン・ヨコハマ・ブリュワリーのビール・レーベル
明治初期　丸善株式会社蔵

横浜の近代工業は、国際都市としての影響を強く受けて発展しました。その端緒となったものは、外来技術であり、慶応元年(一八六五)には幕府により横浜製鉄所が建てられましたが、その運営はフランス人技術者が担っていました。明治期には堀川に面する山下町に外国人の経営する船舶・機械工場が建ちならび、山手にはビール工場が設立されました。

しかしながらしだいに外来技術は日本人により習熟されてゆきます。横浜は外国人の手を離れ新たな工場を設立したパイオニアを多く輩出しました。三味線職人あるいは指物師からオルガン製造に転じたとされる西川虎吉、石鹸の製造をこころみた堤磯右衛門、電線国産化の先駆者の一人である山田与七などが代表格です。横浜の地は、腕におぼえのある者にとって、事業を興す可能性をはらんだ刺激的なまちでした。またスカーフ・レース・真田などの貿易品を生み出すまちとしての横顔もありました。

明治後期から大正期にかけての資本主義経済の成熟により、横浜の工業も発展します。しかしその反面、商人を中心とした横浜資本が後退し、中央の大資本が進出します。山田電線が横浜商人の資本参加で横浜電線となり、さらには古河鉱業と提携して古河電工となる過程は、その典型でしょう。また技術的には卓越していた西川オルガンが後継者を失って、第一次大戦期にハーモニカ輸出や玩具用楽器の販売で業務を拡大していた日本楽器に吸収される事情も、パイオニアたちが興した事業を継承するむずかしさを伝えています。

今回の展示では、現代産業の騎手である自動車が本格的に作られ始めた昭和一〇年前後を下限としています。それ以降の戦時経済下では、工業の担い手たちの顔が「軍需」という圧倒的な経済原理のなかで、ぼんやりとしてしまうことも時期設定をした理由の一つです。工業家は自らを語るところが少ない。またそこに働いた人々はなおさらです。この展示で多くのパイオニアたちをよみがえらせたいと願っています。(平野正裕)

企展画

工業都市への鳴動 ―ビールから自動車まで―

展示資料から

渡邊船渠資料

日本の工業化の初期に「渡り職工」と呼ばれる技術者が存在した。船舶・機械などの技術に熟練し、給与条件のよい工場を渡り歩き、新たな技術を習熟しつつ、自らの熟練技術を普及させていった者たちである。横浜の渡邊船渠の創始者渡邊忠右衛門はそのような技術者としての生涯が追える数少ない例である。

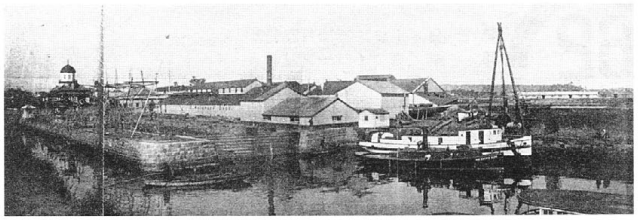
安政二年（一八五五）、前年の地震に伴う津波と暴風雨で沈没したロシア船ディアナ号の代替船として、伊豆の戸田で、洋式帆船「ヘダ号」が進水した。建造にあたったのはロシア人と江戸幕府の役人と地元の船大工であった。この船大工のなかには、上田寅吉のように、のちに長崎海軍伝習所第一期伝習生としてオランダ人から蒸気船機械製作の幕命を受け、さらにはオランダ留学をはたす者もいた。忠右衛門の父金右衛門もまた「ヘダ号」建造にあたった船大工の一人であり、安政三年石川島造船所に技師の一人として招かれた。忠右衛門は嘉永元年（一八四八）の生まれであるから、齢八歳のときである。文久三年（一八六三）十五歳の忠右衛門は、父の手引きもあってか、石川島に入り、慶応二年（一八六六）には建設中の横須賀製鉄所（のちの、横須賀海軍工廠）に転じた。ここで忠右衛門は、フランス人技術者バスティアンに師事することとなり、その関係は明治三年（一八七〇）末、バスティアンが官営富岡製糸所の建設のため横須賀を離れる直前まで続いた。忠右衛門は、同年一〇月横浜居留地六九番地の英国人ウィットフィールドが経営する横浜鉄工所に入り、明治七年十一月に東京築地の海軍兵学寮に転じた。ここで英国海軍顧問団の機関術科科長のサットンに師事し、造船に加えて機関術を習得することとなった。

造船・機関両方の技術をつんだ忠右衛門は、明治十一年（一八七八）、横浜の海岸通りに三菱がボイド商会と提携して経営していた三菱製鉄所に引き抜かれる。三菱製鉄所は、明治十八年に日本郵船会社横浜鉄工所となった。忠右衛門は、同所の横浜監督課船長監督ウォーカーの下で働き、二五年には同所の技手となった。またどの時期かは不明であるが、郵船鉄工所に先立ち、アイルランド人ハンターらが経営するところの、大阪鉄工所にも技手として身を寄せていた時期があったようである。

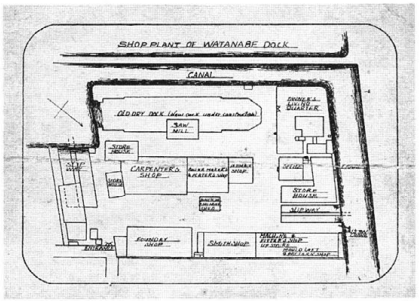
明治二九年（一八九六）、日本郵船横浜鉄工所は、横浜船渠に売却され、同社の鉄工部となった。忠右衛門は横浜船渠では、造船部係長としての職にありつつ、同年「丙申工場」と命名された造船所を平沼町四丁目に開設した。そして三一年一月横浜船渠を辞して自らの船渠経営に専心することとなった。四月工場を高島町五丁目に移し、渡邊造船鉄工所と改称した。

明治四二年（一九〇九）忠右衛門は神奈川台場の東隣の海岸を埋立て、ドックを開設し渡邊船渠と改称した。戊申丸・有明丸などの小型汽船の新造も手がけた。第一次大戦の船舶需要のなかで、業務を拡大し、大戦後の反動恐慌が顕在化する直前の大正九年（一九二〇）三月三日に七十三歳でその生涯を終えた。

今日渡邊船渠に関係する資料はほとんど残っていない。しかし忠右衛門のように「渡り職工」の一生涯を振り返ることのできる事例は横浜では数少ない。忠右衛門の事績は、数種の人名録や中区妙香寺境内にある「渡邊忠右衛門翁碑」に記録されるにとどまるが、横浜工業化のパイオニアの一人として、とくに紹介するものである。



神奈川町に新設された渡邊船渠
『実業の横浜』明治44年(1911)1月号　横浜市中央図書館蔵

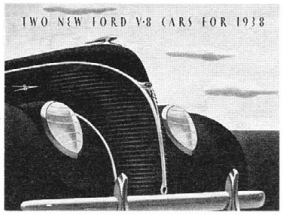


渡邊船渠の工場配置図　渡邊戊申株式会社蔵

富士瓦斯紡績『富士のほまれ』

富士瓦斯紡績保土ヶ谷工場については、昨年の企画展示「大正期の横浜」で、全国初の工場処女会（女子青年会）による少女歌劇の内容を紹介した（『開港のひろば』五七号）。同工場は大正期に六千人の労働者を擁した県内最大の工場であり、また

模範女工の表彰記事
『富士のほまれ』大正4年(一九一五)2月28日　富士紡績株式会社小山工場蔵



フォードV8車　カタログ
昭和12年　添田有道氏蔵

同社社長和田豊治は、日本の経済界のなかで労資協調に積極的な経営者の一人であった。少女歌劇も当時人気絶頂にあった浅草オペラの脚本家兼翻訳家小林愛雄に依頼するなど、世間の注目をあびたものであった。

その後の調査によって、富士瓦斯紡績発祥の地である、静岡県駿東郡小山町の富士紡小山工場に、『富士のほまれ』と題する労働者むけの新聞が保存されていることがわかった。同紙の存在は、断片的には確認されていたが、今回の発見は、六〇号（大正三年）から一九九号（大正一五年）の長期にわたるもので、大正期労働組合運動の生成から発展期に位置し、労資関係の大きな転換期をカバーしている注目すべき資料である（もちろん、保土ヶ谷工場のみならず、小山・川崎・東京押上などの諸工場の情報も入っている）。

日本の労資関係は、「経営家族主義」なる概念で論じられることが多い。「経営家族主義」とは、資本家と労働者とを親子関係に置き換え、会社経営を「イエ」の良好な存続の理念に擬したものであり、「温情主義」とも称された。終身雇用や年功賃金制、社宅制度、工場内学校や医務室の設置、各種の貯金貸与制度、懇話会・親睦会など—世界最高水準の賃金を得ている今日では時代の差を感じるが—戦後の経済学・社会学では、日本の労働者が低賃金でありながら会社への帰属意識が高い根拠として論じられたものである。

紡績工場は寄宿女子労働者が多数を占めるため、病室や教場の設置は明治三〇年前後にはみられ、施設の導入は総じて早い。『富士のほまれ』に見る保土ヶ谷工場の事例としては、大正四年（一九一五）二月の男工懇話会が認められる。これは男工と工場長らとの懇親会である。翌五年五月には通勤女工のための乳児収容所が設立されている。

その後の施設としては、

・大正六年＝社宅在住児童保護者会（工場勤務者の児童の不良防止）
・大正七年＝耆老慰安会（女工の父母祖父母を招いた懇親会）
・大正八年＝徒弟学校（職工教育）の新設、父兄訪問会（女工出身地での父兄懇親会）、役付工講習会（職工長らの技術講習会）
・大正九年＝処女会（先述）
・大正一〇年＝基本財産蓄積会（互助会組織）、家事講習会（寄宿女工対象、花嫁修業）

などがあり、運動会・音楽会・俳句同好会などの各種同好会も実施された（保土ヶ谷工場の事例が他工場で採用されていないことはないであろう事と同時に、他工場の施設もまた保土ヶ谷工場にあったろうと考えられる。以上の施設はあくまでも保土ヶ谷工場の記事として掲載されたもののみである）。

『富士のほまれ』には、女工たちの父母への送金記録があり、多額送金者は、大きな活字で紹介された。また模範工表彰の記事は、写真入りで掲載され、「従順で無邪気で会社の掟や年上の方の教訓を守り能くお仕事に勉め」「寄宿舎では室長」「年頃の盛りであるのに虚栄に憧れ髪容を虚飾することなく」「毎月の工賃は概ね御両親の許へ御送金」と会社の一員としても家族の一員としても理想的であることを紹介している。

『富士のほまれ』は、会社側が作成した新聞であり、当然のことながら一面的な性格を免れえないが、大正期紡績業の労資関係史を研究する資料としては、大きな発見であろう。本展示の開催とともに、当館閲覧室で公開し多くの方々の利用を期待している。

映像資料

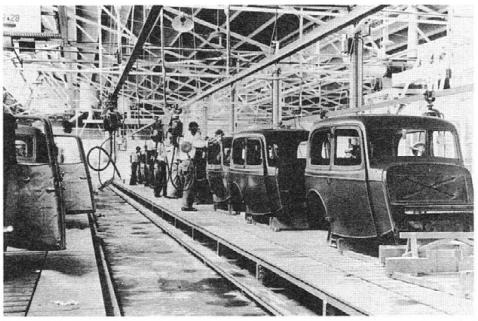
本展示では初公開の映像資料として三本のビデオが閲覧できる。

第一は、米国スミソニアン協会が所有し、平凡社を設立した下中弥三郎を顕彰する財団法人下中記念財団の収集にかかる「ビューティフル・ジャパン」という映画のなかからの浅野総一郎の関係事業映像の抄録である。制作者は米国籍のベンジャミン・ブロッキー。大正六年（一九一七）から七年にかけて撮影された無声映画であるが、二時間余りにわたる映像の中に、浅野造船所の進水式の光景、浅野セメント門司工場（福岡県）・上磯工場（北海道）の現場が約一二分間映し出されている。

第二は、山手天沼の工場が関東大震災で倒潰したため、鶴見生麦に工場を新設した、麒麟麦酒の工場落成祝賀園遊会の光景を記録したもの。大正一五年（一九二六）撮影。キリンビール株式会社所蔵。生産現場が映されているものではないが、工場移転を祝う地元の人々が記録されており、地元にとって重大事であったことがうかがえる。無声約一二分。

第三は、日産自動車から提供された映像。一つは大型車ニッサンの生産過程をトーキーで記録したもの。もう一つは小型車ダットサンの製図工程から、生産・試験、工場からオフラインするまでを詳細に記録した無声映画。双方とも自動車技術史上類例をみない詳細な映像で、日本におけるフォード・システムの実施例をみることができる。両方で約一時間。

（平野正裕）



ダットサンの製造風景　日産自動車株式会社蔵

展示
余話

アーネスト・サトウ旧蔵和本類

前回の企画展「幕末維新期の英外交官アーネスト・サトウその時代と生涯」では、武田家に残されていたサトウ旧蔵の和本や地図、蔵書目録をいくつか紹介した。左に掲げるのは、これら和本や地図類六二部約一七〇冊の全リストである。出版者等の書誌事項は紙幅の関係で省略する。※印は「英国薩道蔵書」印がおされているもの、ゴチックは八種類の蔵書目録に収録されているものである。また目録から購入時の価格が判明するものは、適宜末尾に示した。

※厳島扁額縮本　一名厳島絵馬鑑　五巻　千歳園藤彦著　天保三年
※新撰江戸砂子　六巻　菊岡沾涼編　享保一七年
※延喜式　神祇巻　一〇巻　藤原時平等著　卜部兼倶編　文亀三年　六五銭
※花彙　草部四巻・木部四巻　雍南田充房序・小野蘭山(識)　小野蘭山写図　天保一四年(新校正)
※改正日本地誌略・日本地誌要略字引審詳　五巻　今井匡之編　明治一一年
※甲斐叢記　一名甲斐名所図会　前輯　五巻　大森快庵編　嘉永四年
※再撰花洛名勝図会　東山之部　四巻　木村明啓・川喜多真彦編　元治元年　二〇匁
・願懸重宝記　万寿亭正二著
・邯鄲諸国物語　初～三・六～八編　柳亭種彦作　天保五年～一二年
・北蝦夷新志　岡本文平著　慶應三年
・金城秘韞(伊達氏史料)　仙台黄門遣羅馬使記事　大槻玄沢遺稿
※草花絵前集　松野屋宇右衛門　元禄一二年
・桂園竹譜　五巻付録　〔岡村尚謙(遜・桂園)著〕　文政一一年
※(改正銅版)皇国道中早見一覧　橋本輿八郎編　明治一一年
※古能免乃説　前田夏蔭著　山城国上林家蔵刻　文政一二年
・地口行燈　後編　松川半山画
・春秋雑誌会話篇
・植学浅解　初編　田中芳男閲　小野職愨訳　文部省　明治六年
・新編金瓶梅　第六～一〇集　曲亭馬琴作　天保一〇年～弘化四年
・善光寺絵詞伝　六巻付録一巻　卍空纂述　安政五年
※雙蝶記　六巻　山東京伝編
・草木性譜　三巻　清原重巨撰　文政一〇年
・(銅版新刻)大日本地図道中記　橋本輿八郎編　明治一二年
※東海道中山道道中記　一名諸国道中袖鏡　天保一〇年
※東海道名所図会　六巻(巻一欠)　秋里舜福(籬島)編　寛政九年　六冊で一分一朱
・東国名勝志　五巻　鳥飼酔雅著　宝暦一二年
※唐土名勝図会　第一集六巻　岡田友尚編・画　文化二年八月序
※毒品便覧　第一集　小野職愨撰　明治一一年
※浪華の賑ひ　第二編　鶏鳴舎暁晴(暁鐘成)編　文久三年　三冊一〇匁
※成田参詣記　一名成田名所図会　五巻　中路定俊著　安政五年　六〇銭
・日光山志　五巻　植田孟縉編　天保八年
・日本山海名物図絵　四　〔平瀬徹斎編〕
・日本竹譜　三巻　片山直人著　明治一九年
・備荒草木図　二巻　建部由正(清庵)著　天保四年
※百富士　四巻　河村岷雪〔作・画〕　天明五年
※尾蠅欧行漫録　一～六巻(四巻後半欠)　市川渡(鯨)著　文久三年　自序　三〇匁
・北海紀行　五巻付録一巻　林顕三編　明治七年
※乙未本草会物品目録　嘗百社等編　天保六年
・本草綱目図　三巻
・増補本草備要
※三重県地誌略(三重県小学教科本)　御巫清生編　明治一一年
※三河記　三巻　「寛永元年冬以大久保家秘本写之」
・都絵馬鑑　五巻　速水春暁斎編　文政二年序
・毛詩品物図攷　三・四巻　岡本鳳編
・有用植物図説　図画　三巻　田中芳男・小野職愨撰　明治二四年
※琉球人来聘記並諳厄利亜寇清〔天保年間〕　写本
※琉球談　二巻　森島中良著　寛政二年　写本
・越後国郡図　三至六　小林廉造編　明治一二年　木版色刷
・尾張国全図　斎藤員象等著　明治一二年　彩色
・(改正部分)甲斐国全図　森丈助製図　明治一二年　彩色　九匁
・九州海岸絵図　肉筆彩色　三匁
・九州九ヶ国之絵図　一名大日本九州之図　文化一〇年　木版色刷　三匁
・相模武蔵二州図(大日本全図第五号)付伊豆七島並小笠原群島図　地理局地誌課　明治一二年　彩色
・駿河甲斐伊豆三州図(大日本全図第四号)付伊豆七島並小笠原島図　地理局地誌課　明治一二年　彩色
・大日本全図之内出羽全図　木版色刷　五匁
・大日本北海道十一ヶ国略全図付奥夷　松田緑山製　(明治初年)　銅版手彩色
・千葉県治全図　小沢直人編　明治一〇年
・(改正)遠江国全図　奥山義篤撰　明治一二年　木版色刷
・(増補改正)番町絵図　景山致恭著　嘉永五年　木版色刷
・(官許)飛騨国中全図　松村梅宰著　松村興四右衛門校　木版色刷
※山梨県下甲府之図　一名甲府絵図　(改正)　森丈助製図　明治九年　(製図)　色刷
※(銅刻)琉球諸島全図　大槻文彦製　明治六年　銅版彩色

(吉良芳恵)

新収史料

辰巳芳子氏旧蔵
東大法学部附属近代日本法政史料センター蔵
辰巳一文書

今回新に、当館で閲覧公開されることになった辰巳一文書（複製）を紹介したい。

この文書は日清戦争黄海海戦の日本側主力艦であった、旗艦「松島」と「厳島」の建造にたずさわるなど、日本海軍造船史に大きな足跡を残した辰巳一に関する史料である。日本の近代科学史上、貴重な一次史料である。

ご子孫の辰巳芳子氏（料理研究家、鎌倉市在住）が長年、大切に保管されてきたもので、昨年、東大法学部附属近代日本法政史料センターに寄贈となった。

東大への寄贈に先立ち、文書の内、横浜の歴史に関係の深い横須賀製鉄所（後、造船所と改称）黌舎およびシェルブール留学時代の史料を中心とする四八点を、一般閲覧公開のために撮影させていただいた。

文書撮影にあたっては、小野雄司氏（日本数学史学会会員）と橋本毅彦氏（東京大学先端科学技術研究センター）のご協力をえて、両氏がすでに作成されていた目録を基におこなった。

辰巳一の肖像画（辰巳芳子氏蔵）

横須賀造船所黌舎に学ぶ

文書中に辰巳自身が書き残した「履歴」と補遺があるので、それに拠って経歴をみてみよう。

安政四年（一八五七）、金沢藩士辰巳安重の長男として金沢に生まれた。明治三（一八七〇）年、藩命を受けて洋式兵学を直接に外国人から学ぶため、横須賀製鉄所黌舎に派遣された。一三歳の時であった。

横須賀ではサルダやデュポンといったフランス人教師から、数学や物理、化学などを直接フランス語で学んだ。廃藩置県後も、官費生となって一〇年まで同所で学んだ。

公開する文書中には、この時に辰巳一が記した数学（方程式・解析幾何学・虚数解・代数・微分積分など）や物理学、化学の講義ノートが多数、含まれており、全文、丹念なフランス語でつづられている。

その数学史的価値については、佐々木力「辰巳一文書の数学史的意義――明治数学史の重要な一章」（『数学セミナー』一九九八年二月号）に詳しい。

フランスで造船学を修める

明治一〇年、造船学を学ぶために海軍省留学生としてフランスのシェルブールに派遣された。

この留学時代に書き留めた造船学関係の講義ノートも公開文書中にみえる。

シェルブールの海軍造船学校を優秀な成績で卒業し、ついで英仏の主な工場を視察後、一四年に帰国した。

海軍造船技師として活躍

そして直ちに横須賀造船所勤務となり、その後、海軍省主船局、神戸小野浜、呉、横須賀、佐世保などの諸海軍施設でおもに軍艦建造にたずさわった。

この間、明治一九年には再渡仏し、二五年までの六年間、軍港、ツーロンにおいて海防艦「松島」と「厳島」建造の監督をつとめた。この二隻は「橋立」とともに三景艦とよばれ、日清戦争時の日本連合艦隊の主力艦であった。

設計には辰巳自身も加わっており、この二隻の大判の着色設計図面や仕様書、見積書などが残っている。この内、当館では仕様書と見積書類を閲覧公開する。

二五年に帰国した後は、小野浜造船所で日清戦争に向けて水雷艇一〇余隻建造の多忙な日々をおくった。これらの水雷艇は、二八年二月の威海衛作戦で大きな戦果をあげた。

二八年、造船大監に任じられた。

また造船技師としての功績がみとめられて、フランス政府から明治二五年に、レジオン・ドヌール勲章を受けてもいる。

その後、佐世保海軍造船廠長の職にあった明治三六年に足を負傷し、歩行困難となったため、待命となった。三七年に予備役に、大正三年に後備役となり、大正五年に退役となった。

予備役となってからは、三菱合資会社に勤務するなど民間事業にもたずさわっている。

居留外国人が経営する横浜鉄工所で造船事業に従事する計画もあったと「履歴」補遺には記されている。この横浜鉄工所とは、アメリカ人のキルドイルが堀川通りの鉄工所街に経営していた横浜機械並鉄工会社のことであろう。同会社は、当時近隣の工場を合併し、最盛期をむかえていた。

昭和六年（一九三一）、七四歳で没した。

以上の文書（複製）は、当館閲覧室で閲覧公開され、研究目的であれば複写も可能である。

なお寄贈を受けた東京大学法学部附属近代日本法政史料センターでは、再整理後、詳細な『辰巳一関係文書目録』（『近代立法課程研究会収集文書』No.九三、一九九八年）を刊行した。当館で未撮影の文書については、この目録を参照されたい。

末尾になりましたが、ご子孫の辰巳芳子氏、河村雄三郎氏、撮影にご協力いただき、種々ご教示くださった小野雄司氏、橋本毅彦氏、そして陳肇斌氏（東京大学法学部附属近代日本法政史料センター）にたいして厚くお礼申し上げます。

（中武香奈美）

エルギン卿を見た日本人

近代日本は「国際化」の時代であったと言われることが多く、その始まりであった幕末段階での外国人との出会いの様子が話題になることも多い。しかし、その多くはペリー来航や横浜開港後の居留地での様子を伝えるものであり、それ以外の外国人との交流について記したものは大変少ない。これはペリー来航と横浜開港が日本人にとってもっとも大きなインパクトを与えた事件であったからと考えられるが、幕末の日本人と外国人との交流は横浜だけを舞台にしていたわけではなかった。

たとえば、安政五年（一八五八）に行なわれた各国との通商条約の締結交渉は江戸が舞台であり、その過程で各国使節と日本人との間でさまざまな交流が繰り広げられた。また、交流の担い手は幕府官僚だけではなく、江戸の一般庶民も間近に各国使節に接することになった。こうした経験が横浜開港後の貿易の発展や横浜への人びとの移住をスムーズなものにしたと考えられ、この時の交流が開港を翌年に控えた日本人にとって極めて貴重な経験であったことは間違いない。

ところで、国立国会図書館には、安政五年に江戸を訪れたイギリス使節エルギン卿の世話をした江戸町人の日記が所蔵されている。この日記は「えびすのうわさ」と題され、条約締結のために江戸に滞在したイギリス人たちの様子が克明に記されている。開港直前に日本人たちがどのように外国人を眺めていたのか大変興味深い問題であり、その記述を抜粋しながら「えびすのうわさ」を紹介してみたい。

西応寺の給仕人

「えびすのうわさ」には著者の名前が記されていない。しかし、記述内容からみて著者は江戸本石町十軒店（現在、東京都中央区）に住んでいた町人であったと考えられる。また、彼の商売がなんであったのかも不明であるが、外国の文物に強い好奇心を持った人物だったようである。

彼がイギリス人について詳細な記録を残すことができたのは、先に述べたようにエルギン卿の来日に際しイギリス人たちの世話をする給仕人に任命されたからであった。給仕人というのはイギリス人宿舎である西応寺（現在の東京都港区にあった寺）に詰め、イギリス人の下働きをする人びとのことで、給仕人になることによって彼は間近でイギリス人を観察できるようになった。

こうした制度がいつ出来たのか、どのような町人が給仕人に任命されたのかは分からないが、少なくともイギリス使節の場合、複数の江戸町人が給仕人として西応寺に詰めたようである。また、イギリス使節は七月八日から七月一八日まで西応寺に滞在し、この間、中国人・黒人を含む二十人前後の使節団が複数の給仕人との交流を持つことになった。

その様子を日記は「給仕人数多くありて座敷・寝所・勝手向、すべて諸用を手伝う（中略）公儀より厳しく御法度にて異国人の旅宿にて異人にもの言うべからず、異人もの言うとも挨拶すべからず、物遣るべからず、貰うべからず、取り替えるべからず、この五ヵ条を犯すものは直ちに縛られるなり、されども商人の控え所などへ異人来たり双方より珍しき事に思い、いろいろ話するなり、酒食・女のことなど休む間なし、異人茶を飲まんとする時は茶と言い、煙草は煙草と言う、出入りに見物人混雑の時はごめん・ごめんと言うて通る、控え所を出る時は座中へ各々お辞儀して出て行くなり、日本人も少し覚えし蕃語を使う」と伝え、幕府が交流を禁止したにもかかわらず給仕人たちが親しく外国人と話しをしたと述べている。

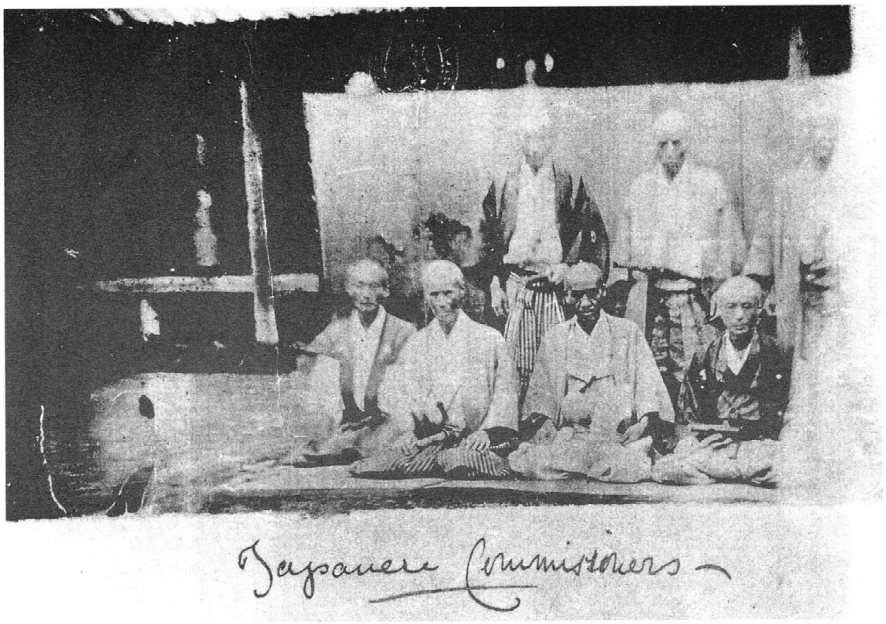
使節団の暮らしぶり

では、使節団の日常生活は彼の目にどのように映ったのだろうか。まず、食事については次のように記している。

「常食一日に二度なり、朝五ツ半頃に一度、夕七ツ時頃に一度なり、その外はパン又は果物の類を手当り次第に食らう、英人およそ二十人にて米五合を飯に焚き一日の食に当てて余るくらいなり、一人前一日飯米二三勺なり、米は少なけれども肉類を多く食らう、一人前に鶏の丸油揚げ一羽ずつ食らう、この油揚げの仕方、生きたる鶏を半殺しにして毛羽を去り、煮え湯の中に入れ、よく茹でて引き上げ、湯を拭き取り首を抜き去り油釜に入れて揚げる、英人これを切りながら匙にてすくい食らう、はらわたを残すなり、これは南京人の料理なり、魚類はあまり好まず様子なり、食らうもの鶏・アヒル・卵・茄子・いんげん・ささげ・唐茄子・薩摩芋・里芋、果物は真桑瓜・桃・梨の類見たり、牛・馬・豚・犬などは逗留中食わず様子なり、パンは平常の食物、軍中兵糧なり、パン製法を載す、麦粉に塩・油・鶏卵を交え丸めて饅頭の形に作り蒸して後、ほいろに掛けて乾かすと言う、すべて鉢皿の物を食らうに灰ならしの如き物に匙の上へ取り上げ、その匙にて食らう」

この部分には調理人についての記述があり、料理は随行した中国人の担当であると記している。また、主食は米とパンだったようで、パンについては詳しい調理方法が述べられている。さらに、副食としては鶏の唐揚げを中心に、さまざまな野菜や果物が食卓にのぼったとある。事実を淡々と述べた文章ではあるが、日本人との食生活の違いに驚いている著者の姿が思い浮かぶ。

次に、外国人の衣服については以下の記述がある。「人物衣服・冠り物など一日の内に度々変わり、その時々の都合よきに従うと見え、これがこれというきまりなし、又、一日の内、一衣にて着改めざる者もあり、今ここに写せしは大概なり、（中略）



イギリス使節と通商条約の交渉にあたった幕府の代表団。左から森山、井上、岩瀬、堀、水野、永井、津田といわれている。西応寺で撮影されたと伝えられ、「えびすのうわさ」の著者も撮影に立ち合ったのかもしれない。（VICTORIA & ALBERT MUSEUM 提供）

衣服胸に二通りボタン掛あり、手首に左右二つずつボタンあり、喉にて結びしは衣類多くは毛織にて皮肉を刺すゆえ肌着の衿を首のまわりへ確と紐にて巻き付け、毛織の毛針を防ぐものと見ゆる」

衣服については食事の記述より簡単であるが、日本人にとって珍しい毛織物について触れている。また、イギリス人が持参した帽子・傘・杖に興味を覚えたのか、著者はさまざまな種類の帽子・傘・杖の絵を別の箇所に載せている。さらに、外国人の中には外出した際に日本の着物や草履を手に入れた者もいたようで、次のような記述もある。

「イギリス人中官か下官なるべし、先頃中、度々王子へ見物に行き、王子の茶屋の女に種々戯れ、その女が着せし藍弁慶縞の木綿浴衣が欲しくなり、旅宿へ帰り早々かの弁慶縞を買い取り、筒袖の衣服を拵え常に着用して友達にのろける、ちなみに言う、イギリス人と共に来たりし黒ん坊、江戸の鳶者のめくら縞、こはぜ掛の足袋にて白鼻緒の裏付草履を履て歩行するを見て欲しくなり、鳶の者に右二品を無心して自分そのめくら縞にはぜ付の足袋、白鼻緒の突っ掛け草履を履きて歩行せし黒ん坊ありしとぞ」

ここに記されたようにイギリス人たちは滞在中に度々王子（現在の東京都北区、この地は江戸を代表する名所で江戸町人の憩いの場であった）を訪れ、その一人は王子の茶屋の女性が着ていた木綿の浴衣を手に入れている。また、このイギリス人は浴衣を筒袖の衣服に作り替え、友人たちに自慢していたとある。さらに、黒人の一人は鳶職人が履いていた足袋と草履を入手したとある。

残念ながら、入手方法については記していないが、浴衣の場合、宿舎に一旦帰った後に入手したとあるから、給仕人が間に立って購入する方法があったのかもしれない。いずれにしても、使節団と江戸の庶民との間で、さまざまな交流があったことを推測させる記述である。

日本人との比較

このように著者は西応寺での外国人の暮らしぶりを克明に観察したが、その中には外国人と日本人とを比較するような記述がある。たとえば、イギリス人については次のように記している。

「人情、上官人は知らず、中より下を見るに格別日本に変じるなし、出立前には逗留中馴染みになり商人共などへ夫々暇乞いに来たる、されども上下差別は格別見えぬなり、行列行儀も格別見えず、寝所の布団の上へ鳥・獣を乗せて同居し座敷または二階へ犬・狆の類を引き歩く、この様子にては犬・猫の食い残しを食べるもあるかと思われる、日本の人品ははるか劣れり」

この箇所ではイギリス人の人情に触れ、出立前に馴染みの日本人に挨拶するイギリス人がいたことを伝え、日本人と変わるところがないとしている。しかし、イギリス人たちが西応寺にまでペットの犬や鳥を持ち込んだことについては理解できない行動としている。特に、寝所までペットを持ち込んでいることについては、日本人の人品に劣る行為であると批判している。

また、中国人については次のように述べている。「人柄日本人に変わらず、身の丈・肉色・髪色・鼻・口・耳とも和人に違う所なし、眼中少し赤味あり、頭は項上に手のひら程毛を残し、四方みな月代をすり、俗に言うけしぼうずなり、その毛の後ろの方にて一所結び毛を三つ組にして後ろへ下げる、しかれとも地の毛は下がり、二尺位にて跡三尺余は馬の尾かなにかを足したる様なり、平常立ち働きの時は三つ組の毛を鉢巻きの如く頭へ二三巻まきおくなり、人情少し英人・黒人よりゆったりしたる所あり、この者は台所料理人なり、食物英と違う所あり、予か眼前にて平常の飯椀にて米飯二杯食いしなり、（中略）清人へは和人より筆談も出来るなり、しかれとも扇面の詩などを見せるに読めぬ所もあり、これは清国下賤の者ゆえなるべし、日本には下賤にも歌・俳諧のできぬ者いくらもあるなり」

ここでは中国人の姿を描写し、日本人と似たところがあるとしている。また、中国人とは筆談ができたとある。はたして中国人と日本人との間でどのような筆談がなされたのか不明であるが、こうした筆談が新しい交流の始まりであったことは間違いない。また、この時、使節団に接した人びとが作り上げた外国人に対する認識が、どのように情報として広まっていったのか、大変興味深い問題ではあるが、この点については今後の課題としたい。

（西川武臣）

閲覧室から

五味文庫から（2）
―西洋料理店開店広告―

五味文庫には、『太田之草鞋』と題された四冊の貼込帳があります。五味亀太郎氏がなぜ貼込帳を『太田之草鞋』と名付けたのかは不明ですが、興味深い貴重な資料が収められています。その『太田之草鞋』のなかから、今回は西洋料理店開店広告を紹介いたします。

『太田之草鞋』Ⅰには、「口演」「五味文庫一四―四」といった西洋料理店開店広告が四点ほど収められています。「口演」は、牛肉店の梅林亭の広告で、入船町での商いが繁盛し、湊町へ転居、西洋半料理を始めたというものです。残念ながら西洋半料理がどのような料理であったのかは分かりません。

「開業広告」「五味文庫一四―四九（二）」も、馬車道の牛肉店富竹亭の広告です。しゃもと合鴨鍋、お手軽西洋料理を供していたとあります。広告には食堂が休業の時は牛肉店を開業するとあり、牛肉と西洋料理が深く結びついていたことがわかります。

「西洋料理開店御披露」「五味文庫一四―五（一）」は、弁天通一丁目の開喜亭の広告です。「稟告」「五味文庫一四―四四」は、相生町一丁目の滋養亭が、東京の南伝馬町に青陽亭を開いたというもので、「『美婦的』なぞの御愛敬ハ無けれども、廉価と美味が『勝列』と『シチウ』の御蟲肩をちからに一心『フライ』に出精すれば、成程彼は調進に心を『ロース』と思召さば、何卒本店同様に相変らず御引立の程伏て奉冀候」と料理を折り込み洒落ています。開喜亭は、一等から五等の料理のうち一等が一円、青陽亭は上中並のうち上が七五銭とあります。それぞれ広告の出された時期はわかりませんが、明治二〇年頃、玄米一〇㌔が三八銭程であったといわれており、西洋料理はけっして「廉価」はなかったことが分かります。

『太田之草鞋』には、今回ご紹介した西洋料理店開業広告のほかにも、菓子店広告や芝居小屋開店広告などがあります。複製本での閲覧が可能ですので、閲覧室で請求のうえご覧ください。

（石崎康子）

●閲覧室からのお知らせ

閲覧室の図書整理のため、左記の期間閲覧室を休室とします。

平成一一年二月二三日（火）～二六日（金）

また月末整理日のため、左記の日も閲覧室は休室になります。

平成一一年三月三一日（水）

ご理解とご協力を、よろしくお願いいたします。

前回閲覧室にパソコンが設置されたことをお知らせいたしましたが、設置以来多くの方々にご利用いただいております。当館所蔵の横浜関係地図のうち二〇七点が、また横浜外国商館建物写真二四六点がパソコン検索でご覧いただけます。閲覧室へお越しの際は、是非ご利用ください。

資料館だより

▼展示

(1) **「工業都市への鳴動―ビールから自動車まで―」** 10／28(水)～平成11年1／31(日) 19世紀後半から20世紀にいたる横浜の工業化の足取りとその担い手たちを紹介します。

(2) **「英仏駐屯軍と横浜」（仮称）** 平成11年2／3(水)～4／25(日) 幕末維新期の英仏駐屯軍に関する新収史料を通して、将兵の生活や外国人居留地の変化、日本社会への影響などを探ります。

▼寄贈資料

(1) **写真アルバム Yokohama Reconstructed 1929（横浜市発行、1929年4月）** 1点（三浦郡葉山町一色　Lady Bouchier 氏）

(2) **平野むめ葬儀写真（台紙付）ほか** 6点（愛媛県松山市祓川　島津豊幸氏）

(3) **旧大岡町松本材木店史料** 3点（保土ヶ谷区上星川　西部清氏）

(4) **小泉家古文書（書簡・ハガキ・教科書・雑誌・新聞など）** 878点（金沢区六浦町　小泉元久氏）

(5) **明治11年貝藻餌取場絵図面ほか** 1点（磯子区杉田　間邊俊雄氏）

▼案内板の新設

当館ではこのほど、構内の案内板を全て新設し、入館者が利用するためにより分かりやすいものにしました。正門・東門・西門の3個所の入口に館全体の平面図を設け、現在地を示し、展示室や閲覧室への導線を明確にしました。

また、東門と西門には旧英国総領事館の説明を施した銘板も設置しました。当館では引き続き閲覧室等の案内表示も分かりやすくするため計画を進めています。

▲大判絵はがき「横浜浮世絵」
上「横浜海岸通之図」明治3年（1870）
下「横浜各国商館真図」明治5年（1872）

いずれも三代歌川広重画で、明治初期の港町横浜の賑わいを伝えています。
上下とも1枚100円（本体価格）　当館・受付で販売しております。

出版物案内

横浜の歴史あれこれQ&A ―近代編―

開港期から大正期までの横浜の歴史を分かりやすく解説した『横浜の歴史あれこれQ＆A―近代編―』が、このほど当館から発行されました。

1頁1項目のQ＆A形式で、横浜の歴史について28の素朴な疑問に写真や絵図を多数紹介しながらお答えしています。ハンディーな小冊子で横浜散歩には必携の書物です。

B5変形32頁・フルカラー
1冊286円（本体価格）
当館・受付で販売しております。